

話し言葉における文末表現と 終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係

—「ネ」「ヨ」が付かない文末表現を中心に—

許 夏玲

キーワード 文末表現、終助詞、共起関係、間接的な働きかけ、モダリティ

1. はじめに

本稿では、「伝達態度のモダリティ」の表現形式である終助詞「ネ」と「ヨ」が文末の「接続助詞（カラ、ケド、シ、ノニ）」「条件形（バ、タラ）」「テ形」及び「引用助詞（ツテ）」の後に付加されることが可能であるかどうかを調べ、これらの表現との共起関係を探ってみる。また、とくになぜ終助詞「ネ」「ヨ」が文末に付かない場合があるのか説明を試みる。

2. 終助詞「ネ」と「ヨ」の機能

本稿では、西田（1977）を採用し、終助詞を以下のように定義する。

終助詞は、述語の終末部にあって、内容的・意味的なまとまりを形成した文の叙述や判断をうけて、それに対する話し手の感動や詠嘆を表出したり、疑問、希望、禁止などをつけ加えることによって聞き手への働きかけの態度を表明したりして文を完結させる役割を担うものである。

（西田1977：258）

終助詞「ネ」と「ヨ」について今までになされてきた研究は多いが、本稿では終助詞「ネ」と「ヨ」の研究に焦点を当てるのではないので、ここでは大曾（1986）、陳（1987）、益岡（1991）、伊豆原（1993）で述べられている終助詞「ネ」と「ヨ」の機能をまとめるにとどめる。大曾、陳、益岡、伊豆原は「ネ」と「ヨ」の機能について基本的に同じ考えである。要するに、「ヨ」は話し手と聞き手との間に知識のずれがあり、両者が対立的な関係にあると話し手が判断するときに使われる。たとえば、次のような場合である。

(1) 帰ってもいいよ。

(2) あっ、落ちたよ。

例(1)と(2)のように、「ヨ」は、ある情報について、聞き手が知らないだろうと話し手が判断し、それについて聞き手に伝える必要があると思うときに使われる。つまり、話し手の判断や情報を一方的に持ちかけるので、場合により、くどさや押し付けがましさを感じさせる。一方、「ネ」は、話し手と聞き手との知識が基本的に一致すると話し手が判断する場合に使われる。「ネ」の例には次のようなものがある。

(3) 今日の会議、3時からですね。

例(3)では、「ネ」は話し手と聞き手との知識が一致していることを前提に、話し手が相手に確認や同意を求めるために使われている。しかし、例(4)のように、話し手が提供した情報を聞き手が知らないのに、「ネ」が付く場合もある。

(4) 客「これ、いくらですか」

店員「それ、二千元ですね」

例(4)のような「ネ」の用法に関して、伊豆原(1993)は、話し手が聞き手に話を持ちかけ、聞き手との間に一体感・共有感を持つとうとするときに使われると言う。

一方、益岡(1991)は、命令・禁止・依頼・勧誘を表現するものを訴え型の文と呼び、このような訴え型の文に現われる「ネ」と「ヨ」は話し手と聞き手の意向のあり方の異同を表現する形式であり、それぞれ両者の意向の一致、不一致を表わしていると述べている。¹⁾

3. 当該文末表現と終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係

話し言葉に多い文末の「接続助詞」「条件形」「テ形」及び「引用助詞」は、話し手の主観的態度を表わす、つまりモダリティを表わす表現形式であると考えられる。²⁾「ネ」及び「ヨ」は同じモダリティのカテゴリーに入る終助詞であるが、「接続助詞(カラ、ケド、シ、ノニ)」「条件形(バ、タラ)」「テ形」及び「引用助詞(ツテ)」で終わる文の後に終助詞「ネ」、「ヨ」が付く場合と付かない場合がある。

8人の日本語母語話者に協力してもらって行った調査によると、全員一致して、文末に終助詞「ネ」「ヨ」が付けられないと判断したのは「カラ(相手の行動や心理的变化を導く情報の提示)」、「ケド(誘いや申し出など)」、「ノニ(強く勧める)」、「バ/タラ(アドバイス)」、「ツテバ/ツタラ(相手の行動・認識の変更を促す)」、「ツテ(問い返し)」、「ツテ(相手の話に反発する)」、「ツテ

(自分の考えを引用して説明する)」と「ッテ(第三者の話そのまま伝える)」である。これら以外のものは、終助詞「ネ」「ヨ」の付加が可能で、コンテキストにより適切なものが選択される。「ネ」はほとんどの文末に付き得るが、「ヨ」が文末に付くと、粗野な男性言葉になってしまうことがあるという文体的制限もあり、筆者の集めた例にはほとんど出て来なかった。

実例を考察した結果、終助詞「ネ」「ヨ」が付き得るのは主に話し手の判断や情意を表わす文末表現のものであるのに対し、終助詞「ネ」も「ヨ」も付かないのは主に間接的な働きかけを表わす文末表現のものであることがわかった。

3.1 基本的に「ネ」「ヨ」が付き得る文末表現

本稿では、とくに終助詞「ネ」も「ヨ」も付かない文末表現に焦点を当て、それらの個々の用法と終助詞「ネ」「ヨ」との共起関係を論じるので、終助詞「ネ」「ヨ」が付き得る文末表現に関し、それぞれの文末表現の実例を挙げることに止めておく。

当該の文末表現の中で、終助詞「ネ」「ヨ」が付き得るのは主に話し手の判断や情意を表わすものである。³⁾ これらは、原因・理由を表わす「カラ」「シ」「テ」、補足説明を表わす「ケド」「シ」、第三者の話を伝える「ッテ」、意外・残念な気持ちを表わす「ノニ」、話し手のdesirability⁴⁾を表わす「バ/タラ」である。⁵⁾ たとえば、次の例を見てみよう。

- (5) 実「いつ来た？」
綾子「十五分ぐらい前」
実「学校は？」
綾子「出席とらない講義だから」(ね) <理由> 『ふぞろいⅡ』
- (6) (愛子がドラ焼きをティッシュで包みながら)
愛子「困るもんですか。古いことをいうんじゃないよ。この頃は誰だって、ハンバーガー平気で食べてるじゃないか」
良雄「ハンバーガーなら格好つくけど」(ね) <補足説明>
愛子「似たようなもんでしょう」 『ふぞろいⅡ』
- (7) (店から出てきて、帰ろうとしている二人)
健一「やっぱり、違って来てるな」
良雄「なにが？」
健一「学生の頃は、一晩中でもしゃべってたのに」(ね) <残念・意外な気持ち>
良雄「そんなこというなよ。ちょっと持って帰った仕事があるんだ」 『ふぞろいⅡ』

- (8) 悟志「いったい、どういうことなんですか？もう話についてはいるんでしょう？」

月田「ああ、あんたの娘が一億円を持ってくればな」(ね/*よ)⁶⁾

<話し手のdesirabilityを表わす> 『家』

- (9) 妻「そとじゃ女房と畳はなんて言っているけど、(台所にいる夫に)今はね、だんなどキッチンは新しいほうがいいんですってよ」<第三者の話⁷⁾を伝える> (テレビのCM)

上記の(5)~(9)の例文において、コンテクストにより終助詞「ネ」や「ヨ」が選択される。⁷⁾

その他、終助詞「ネ」「ヨ」が付き得るのは間接的な働きかけを表わすもの、つまり「命令・依頼・指示などを表わす『テ』」、「相手の行動や心理的变化を導く情報の提示『カラ』<前提情報の提示>」⁸⁾、及び情報提示の仕方を調整するもの、つまり「断言を和らげる『ケド』」である。たとえば、次の(10)~(12)はそれらの例である。

- (10) 晴江「今度レストランおごって」(ね/よ)<依頼>

健一「いいさ」 『ふぞろいⅡ』

- (11) 小春「買物のついでにおやつ買って来たよ。あんたの好きな今川焼、ここ置いとくからね」<相手の行動を導く情報の提示>

『男はつらいよ』

- (12) (晴江の新しい仕事について)

健一「水商売だろうな」

陽子「バーとか？」

健一「バーなら、かくすかな？」

陽子「だって、じゃなかったら」

健一「分んねえよ」

陽子「(小声で) 歌舞伎町とか、そういうところ？」

健一「ししそうもないけど」(ね)<断言を和らげる>

陽子「そうよ」

『ふぞろいⅡ』

3.2 「ネ」「ヨ」が付かない文末表現

当該の文末表現の中で、終助詞「ネ」も「ヨ」も付かないのは主に間接的な働きかけ⁹⁾を表わすものである。¹⁰⁾ これらには、「カラ (相手の行動や心理的变化を導く情報の提示<要請の理由>)」、「ケド (誘いや申し出など)」、「ッテバ/ッたら (相手の行動・認識の変更を促す)」、「ッテ (問い返し)」、「ッテ (相手の話に反発する)」、「ノニ (強く勧める)」、「バ/タラ (アドバイス)」が

ある。

3. 2. 1 カラ（相手の行動や心理的变化を導く情報の提示〈要請の理由〉）

「相手の行動や心理的变化を導く情報の提示」の「カラ」には、単に相手の行動に必要な前提情報を提示するものもあるし、話し手の行動を要請する「理由」に近いものもある。「理由」の「カラ」とは違って、「相手の行動や心理的变化を導く情報の提示」を表わす「カラ」はその文脈と提示された情報の間の因果関係が弱い場合がある。話し手が相手の行動や心理的变化を導く情報を提示する際、その情報は要請の「理由」を表わしている(13)、(14)の「カラ」には終助詞「ネ」も「ヨ」も付かない。

- (13) 綾子「フレンチトーストにミルクティ」
 実「そんなもん食えっかよ」
 綾子「栄養あるから」(*ね/*よ) 『ふぞろいⅡ』
- (14) 長子「大丈夫よ。今にお給料も貰えるようになるし、私だって働くし……。そしたら、部屋も借りられる。お父さんやお母さんに心配はかけないから」(*ね/*よ)
 節子「心配するわよ。夫婦、親子別れ分かれで……。本間さんからはなんの連絡もないし……。日向子だってどうしてるんだか……」 『渡る』

3. 2. 2 ケド（誘いや申し出など）

話し手は文末の「ケド」によって自分の誘いや申し出に結び付く情報を提示し、相手に「誘い」や「申し出」などの働きかけをする。このような「ケド」の後には終助詞「ヨ」は付かない。この「ケド」の後に「ネ」が付き得るかどうかに関しては判定が難しく、母語話者の間でもかなりゆれが見られた。「ネ」の用法とも関係があるようで、もう少し考察してみる必要がある。今後の課題としたい。

- (15) 高杉「酒のむ？」
 季代「ううん」
 高杉「ウイスキーあるけど」(?ね/*よ)
 季代「いいの。ほんと、こんなことで、酔っぱらったりしたら、みっともないわよね」 『時』
- (16) 涼子「… 本校のほうに通学なすったほうがいいんじゃないですか？」
 五郎「ア、イヤしかし、役場でこちらに通うようにと」
 涼子「来年の夏には廃校になるンですよここ」

五郎「ア、ハイ」

涼子「だからどうせならいまからそっちに通ってたほうが。なんなら私から役場へいきますけど」(?ね/*よ)

五郎「ア、イヤしかし、廃校になるまでは。——ぜひともこちらに」
『北』

(17) 健一「ああ、これ(とビニールの袋をさし出し)コンビニで適当に買ったんだ」

克彦「あ(受け取っていいかどうか、と思う)」

健一「おみやげっていうほどじゃないけど」(*ね/*よ)

克彦「ありがとうございます(受け取る)」 『ふぞろいⅣ』

3. 2. 3 ノニ(強く勧める)

文末の「ノニ」は「～ばいいのに」という形で相手に何かを強く勧めるときにも使われる。このような「ノニ」は、期待していた事と逆の事態に際し、話し手が期待していたが、現実には実現しそうにない事を相手に勧めるときに使われるため、強く勧めるニュアンスが生じてくる。

(18) A: 私もお花、習ってみたいわ。

B: じゃあ、やってみればいいのに。(*ね/*よ)

(日向・日比谷1988: 67)

(19) (靴をはいている晴江に)

耕一「(店にいて)夕飯、食べて行けばいいのに」(*ね/*よ)

晴江「いえ。すっかり長居しちゃって」 『ふぞろいⅡ』

3. 2. 4 パ/タラ(アドバイス)

話し言葉において、相手に何か勧めるという状況で、話し手がある望ましい事態の成立を仮定し、それを望ましい結果へ繋がる条件として相手に提示することによって、アドバイスを表わすという用法が派生したと考える。

(20) 純「行ってきてくれ」

蛍「何しに？」

純「手紙だ。——母さんに手紙書いた」

蛍「呼びもどしてくれって？」

純「父さんにはぜったいなしよだぞ」

蛍「いやだ私。お兄ちゃん自分で行ってくれば?」(*ね/*よ) 『北』

(21) 明子「歯に沁みる？」

典夫「ああ、多少」

明子「歯医者行ってみたら?」(*ね/*よ)

典夫「うん」

『時』

3. 2. 5 ッテバ/ツタラ (相手の行動・認識変更を促す)

条件を表わす「バ/タラ」はまた「ッテバ/ツタラ」の形で話し手が自分の気持ちや考えをなかなかわかってもらえない相手に、非難や不快などマイナスの気持ちをこめて自分の主張を強調し、相手に何か行動を要求したり、認識変更を促したりするときにも使われる。これらは「と言えば/と言つたら」から変化したものである。

(22) 寅「どいてろ、どいてろ」

つね「およ、およしよ」

寅「表に出ろ！」

つね「およし ってば/つたら」¹¹⁾ (*ね/*よ)

『男はつらいよ』

(23) 寅「先生、ね、ね、ね、ね、俺もせっかく(お礼)出したもんだからさ、引っこめる訳にいかない」

医者「駄目なものは駄目です ってば/つたら」(*ね/*よ)

『男はつらいよ』

3. 2. 6 ッテ (相手の話に反発する)

(24)のような「ッテ」は、話し手が聞き手の今の話が以前の話と矛盾していることに気づき、聞き手の話の矛盾を指摘するために、聞き手の以前に言った話を証拠として引用し、相手に突きつけて、聞き手に反省させようとするときに使われる。

(24) 良雄「(ドラ焼き食べる)」

愛子「ほら、あんただって食べるじゃないか」

良雄「食べないなんていついったよ？」

愛子「子供じゃあるまいって」(*ね/*よ)

良雄「道歩くのに困るでしょう」

『ふぞろいⅡ』

(25)、(26)のような場合、相手の意見が自分のと違っているため、或いは相手に自分の意見を認めてもらいたい、自分を信じてもらいたいため、「ッテ」によって自分の考えを主張(強調)して、相手を自分の考えの方に引き寄せるように働きかけていると考えられる。

(25) 兄「ゆうべも言ったけどな。一番人気はトーテムーリって馬な」

妹「1枠の2番でしょ」

兄「そうそう」

妹「わかってるって」(*ね/*よ)

『妹よ』

(26) サザエ「どんなこと？」

カツオ「あの公園で幽霊に顔をなぜられたっていうんだ」

タラ「幽霊ですか。ママ、こわいです」

サザエ「カツオ、変なつくりばなしでタラちゃんを驚かせないで」

カツオ「つくりばなしじゃないって」(*ね/*よ)

『サザエ』

3. 2. 7 ッテ (問い返し)

以下の「ッテ」は話し手の言った言葉をそのまま繰り返して相手に聞き、相手からもっと情報や説明を得ようとするときに使われる。

(27) サザエ「まあ、犬だわ」

舟「犬だって？」(*ね/*よ)

サザエ「緑の下に」

『サザエ』

その他、話し手の判断を表わす「ッテ (自分の考えを引用して説明する)」と「ッテ (第三者の話をそのまま伝える)」の後には終助詞「ネ」も「ヨ」も付き得ない。

3. 2. 8 ッテ (自分の考えを引用して説明する)

以下の「ッテ」は話し手自身の考えを引用して相手にある状況に対する説明を提示するときに使われる。

(28) 店員「ずいぶん熱心ね。何を見ているの？」

ルパン「いや、なに、古い指輪を拾ったんでね。値うちものかなって」

(*ね/*よ)

『ルパン3世』

(29) 海老沢「どこ行ってたの？」

はな「田舎です」

海老沢「田舎？」

はな「うん、ふん～、海しかないところで、他に何もなくて。やっぱり東京がいいなあって」(*ね/*よ)

「でも、もう戻るところないし、わたし——」

『協奏曲』

3. 2. 9 ッテ (第三者の話をそのまま伝える)

話し手が文末の「ッテ」を使って、第三者の話をそのまま引用して伝える場合もあると考えられる。¹²⁾ 次の(30)において、「ッテ」の前にすでに終助詞が付いているときには「ッテ」の後に再び終助詞を付けることはできないようである。

- ③⑩ 幸子「そんなこと（病院に行くこと）私がいい出したら大変だし」
 良雄「兄さんがいうのさ」
 幸子「いわないでよかったわ。三時頃かな、（お母さんが）急に二階からおりてらして、デパートでも行って来るわって」（*ね/*よ）
 『ふぞろいⅡ』

終助詞「ネ」と「ヨ」が文末に付くか付かないかの判断は、個人差もあるので、その現象を完全に解明するのは難しい。ここでは考察の範囲を「ネ」と「ヨ」が付かない場合に絞ることにする。

4. なぜ終助詞「ネ」「ヨ」が文末に付かないのか

以上考察した結果、相手への間接的な働きかけを表わす文末表現には終助詞「ネ」や「ヨ」とともに現われないものが多いことがわかった。それは当該の文末表現の間接的な働きかけという機能と「ネ」「ヨ」の意味機能が合致しないからであると考えられる。この節ではなぜ終助詞「ネ」「ヨ」が文末に付かないのか説明を試みる。

4.1 テ形による訴え型の文

命令・禁止・依頼・勧誘を表現する訴え型の文はしばしば終助詞の「ネ」、
 「ヨ」を伴う。次の文はその例である。

- ③⑪ 行きなさい {よ/ね}。
 ③⑫ 返事ぐらいしてよ。
 ③⑬ じゃ、またあした会おうね。

益岡（1991）では、上記のような訴え型の文に現われる「ネ」と「ヨ」は話し手と聞き手の意向のあり方の異同を表現する形式であり、それぞれ両者の意向の一致、不一致を表わしていると述べられている。命令文は、話し手が相手の意向を無視して行為を強制するという表現である。それに終助詞「ヨ」が付加されることによって、聞き手と意向が対立するという話者の判断が明示されると言う。一方、依頼文は聞き手の意向を尊重した表現であり、行為の強制はしないため、「ネ」の付加によって、聞き手の同意が得られるのではないかという話し手の期待が込められる。これに対し、「ヨ」の付加は、聞き手の同意が得られるという見込みが持てないことを表わすため、依頼の気持ちがいほど強く表現されると言う。つまり、本稿で取り上げた命令や依頼を表わす「テ」にも、終助詞「ネ」、「ヨ」を付けることは可能である。

しかし、次の文のように、相手の意向がはっきりしない場合には依頼の「テ」の後に終助詞「ネ」も「ヨ」も使えない。

- ③4 弥生「せっかくきてくれたのに悪いけど、私、もう出かけないと……
いつまで東京にいるの？岡倉にいるのなら、私がいに行ってもいいわよ」
長子「五十万、貸して」(*ね/*よ)
弥生「……？」
長子「事情話してる時間ないけど、半年以内に必ず返すから」

『渡る』

③4のように、相手の依頼に応じてくれるかどうか話し手にはわからない場合には、両者の意向の一致を表わす「ネ」も両者の意向の不一致を表わす「ヨ」も付かないのである。終助詞「ネ」「ヨ」は、話し手の相手の意向に対する判断を示す。もし話し手が相手がお金を貸してくれるだろうと思うのなら、「ちょっと1万円貸してネ」のように「ネ」を付ける。それに対し、話し手は相手がお金を貸してくれないだろうと思うが、どうしても貸してほしい場合、「ねえ、1万円貸してヨ」のように「ヨ」を付ける。このように、話し手の「ネ」は相手は自分の依頼に応じてくれると思っていることを暗示する。一方、「ヨ」は相手は話し手の思う通りにしてくれないかもしれないが、どうしてもそうしてほしいことを表わす。したがって、「テ」の後に「ネ」が付いても、「ヨ」が付いても、相手は依頼や要求を断わるのが難しくなる。

また、例③5のような緊急の場合には相手の意向を推し量る余裕がないため、「ネ」も「ヨ」も使えない。

- ③5 望「(ガストープの消し忘れ) おばあちゃんが忘れたんだ」
文子「忘れたじゃすまないわよ。早く窓あけてッ」
「どっかで水の出る音がしてる、お風呂じゃないかしら。見てきてッ」

『渡る』

4. 2 間接的な働きかけ

一方、同じく「働きかけ」や「勧め」の機能を持つ文であっても、「ネ」「ヨ」が付いては不自然になる場合もある。3. 2節で取り上げられた例文で見てきたように、「働きかけ」や「勧め」の機能を持つ文末表現はその後に終助詞「ネ」も「ヨ」も付かないものが圧倒的に多い。「カラ (相手の行動や心理的变化を導く情報の提示) <要請の理由>」、「ケド (誘いや申し出など)」、「ノニ (強く勧める)」、「ツテ (相手の話に反発する)」、「ツテ (問い返し)」、「ツテ (自分の考えを引用して説明する)」、「ツテ (第三者の話をもそのまま伝える)」、「バノタラ (ア

ドバイス)」と「ッテバ／ツタラ（相手の行動・認識変更を促す）」はその後に終助詞「ネ」も「ヨ」も付かない。

これらの文末表現にはなぜ終助詞が付かないのだろうか。「カラ（相手の行動や心理的变化を導く情報の提示）＜要請の理由＞」（(13) (14)、「ケド（誘いや申し出など）」（(15)～(17)、「ノニ（強く勧める）」（(18) (19)、「バ／タラ（アドバイス）」（(20) (21)）の場合、話し手は相手に何か勧めたり、行動を求めたり、ときには相手の心的状態を変えようとしたりするが、すべて間接的な働きかけを表わすものであり、それに従うかどうか、受けるかどうかに関する最終的な決定権はあくまで聞き手側にある。したがって、これらの表現の後に両者の意向の一致を前提とする「ネ」は付かない。また、両者の意向の不一致をもとに相手に強く要求する「ヨ」も付かない。話し手が「ッテ」によって相手に問い返す際（(27)、「ッテ」の後に「ネ」も「ヨ」も付かない。

しかしながら、「カラ（相手の行動や心理的变化を導く情報の提示）＜前提情報の提示＞」に関しては、例(11)のように「ネ」が付く場合もある。このような「カラ」の場合、話し手は自分の提示する情報をもとに、相手は自分の期待する行動をとるだろう（きっと食べてくれる）と判断する。話し手が提供する情報は聞き手が知らない場合もあるが、聞き手との間に一体感・共有感を持つとするため、話し手は「ネ」を付けて聞き手に提示する。したがって、例(11)のような「カラ」には終助詞「ネ」が付くと考えられる。

4. 1節で述べられたように、同じく相手に働きかける機能を有する「テ（命令/依頼など）」には「ネ」も「ヨ」も付き得る。このような「テ」は他の間接的な働きかけ機能を有する文末表現とは違う性質を有している。他の間接的な働きかけ機能を有する文末表現（たとえば、「カラ（相手の行動や心理的变化を導く情報の提示）＜要請の理由＞」、「ケド（誘いや申し出など）」、「バ／タラ（アドバイス）」はその要求に応じるかどうかに関してはあくまで相手に決定権を委ねる間接的な働きかけを表わす。一方、「テ（命令/依頼など）」は少し様相を異にする。これが間接的な働きかけを表わすというのは、相手の意志を尊重する依頼の形をとりながら、命令や指示を表わすことがあるという点である。そこで、話し手と聞き手の意向の一致を前提とする「ネ」、相手に強く要求する「ヨ」（下降調の「ヨ」）が「テ」の後に付く場合もある。

4. 3 話し手の主張を強調して相手に働きかけるもの

次に、例(24)～(26)のような「ッテ（相手の話に反発する）」は、相手に自分の考えをなかなかわかってもらえないとき、話し手が相手の以前の話や自分の考えをもう一度主張して、相手の話に反発するときに使われるので、このような

「ッテ」の使われる状況から判断して、相手の認識に頼って、話し手が自分の認識を確かなものにする「ネ」は使えない。また、相手が知っているべきことを繰り返すので、相手の知らない情報を教えてやるという「ヨ」も付かないと考えられる。

「ッテバ／ツタラ（相手の行動・認識変更を促す）」(22) (23) も「ッテ（相手の話に反発する）」と同様に、なかなかかわかってもらえない相手に何らかの行動を求めたり、認識変更を促したりするので、話し手と相手（聞き手）の意向の一致を前提とする「ネ」は使えない。また、相手が知っているべきことを再度提示するので、相手がまだ知らない情報を伝える「ヨ」も使えない。

4. 4 直接引用

直接引用は、話し手が自分の考えを引用して説明する場合 (28) (29) と第三者の話そのまま引用して伝える場合 (30) で、直接引用の「ッテ」の前には終助詞（「カナ」、「ナア」、「ワ」など）が付き得るが、「ッテ」の後には終助詞「ネ」も「ヨ」も付かない。一方、伝聞の場合 (9) は終助詞「ネ」と「ヨ」が付き得る。現時点ではなぜこうした違いがあるのか不明である。今後の課題として更に調べていきたい。

5. まとめ

本稿では、終助詞「ネ」、「ヨ」が当該の文末表現の後に付加されることが可能であるかどうかを調べた。考察した結果、当該の文末表現の中で、終助詞「ネ」「ヨ」が付き得るのは主に話し手の判断や情意を表わすものであるのに対し、終助詞「ネ」も「ヨ」も付かないのは主に相手への間接的な働きかけを表わすものであることがわかった。また、なぜ終助詞「ネ」「ヨ」が文末に付かない場合があるのか説明を試みた。本稿の考察結果は次の表のようにまとめられる。

当該の文末表現と終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係

コ「ネ」 ン「ヨ」 テが ク付 スキ ト得 に る よ り	<p><u>話し手の判断や情意を表わす</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・原因・理由の「カラ」「シ」「テ」 ・補足説明の「ケド」「シ」 ・第三者の話を伝える「ツテ」 ・意外・残念な気持ちを表わす「ノニ」 ・話し手の desirability を表わす「バ/タラ」 	<p><u>情報の提示の仕方を調整する</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・断言を和らげる「ケド」 <p><u>間接的な働きかけを表わす</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・命令・依頼・指示などを表わす「テ」 ・相手の行動や心理的变化を導く情報提示「カラ」(前提情報の提示)
「ネ」 「ヨ」 が 付 か な い	<p><u>話し手の判断を表わす</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを引用して説明する「ツテ」 ・第三者の話をそのまま伝える「ツテ」 	<p><u>間接的な働きかけを表わす</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・誘い・申し出などの働きかけをする「ケド」 ・相手の行動・認識変更を促す「ツテバ/ノッタラ」 ・強く勧める「ノニ」 ・アドバイス「バ/タラ」 ・問い返し「ツテ」 ・相手の話に反発する「ツテ」 ・相手の行動や心理的变化を導く情報提示「カラ」(要請の「理由」)

付記

本稿は平成12年に名古屋大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部に加筆・修正したものです。

注

1)「病院に行けよ」のような命令形による命令文に付く「ヨ」は、話し手と相手の意向の不一致を明示している。益岡は、話し手が聞き手に単に行為を強制するより、聞き手の意向(自分の意向と対立していること)に対する判断を明示するほうが聞き手に対する配慮が多少ともなされていると言う。つまり、「ヨ」の付加は行為要求の表現力を和らげる効果を持ち得る。また、益岡は命令形による命令文には聞き手の意向に反して行為を強要するため、両者の意向の一致を表わす「ネ」は付かないと言う。しかし、命令文における「ネ」の使用に関して、上野(1982)は、「すぐ行きなさいね」のような「～なさい」命令文を取り上げ、「ネ」の付加が可能であることを指摘している。「ネ」の付加によって、話し手の命令に対して聞き手の同意を求める意味で相手の意志を尊重する柔らかい表現になる。このように、益岡と上野では異なる命令文を扱っている。上野と益岡の記述から見

ると、命令文には「ネ」が付き得る場合と付き得ない場合があることがわかる。命令文に「ネ」が付くかどうかに関しては今後さらに調べる必要がある。

一方、依頼文における「ネ」「ヨ」の付加に関して、益岡（1991）は、依頼文は本来、聞き手の意向を尊重し、行為を強制はしないため、「仲良くしてやってくださいね」や「今度紹介して下さいよ」のような依頼文には「ネ」と「ヨ」の付加が可能であると言う。そして、依頼文に「ヨ」が付くと、話し手と聞き手との意向の対立が想定されるにもかかわらず話し手が敢えて相手に依頼するというニュアンスが分かるため、その依頼の気持ちがより強く表現されると言う。

- 2) 詳しくは許（2000）を参照されたい。
- 3) しかし、同じ話し手の判断を表わすものの中でも「自分の考えを引用して説明する『ッテ』」及び「第三者の話をそのまま伝える『ッテ』」の後には「ネ」「ヨ」が付かない。それらの例として次のようなものがある。

海老沢「どこ行ってたの？」

はな 「田舎です」

海老沢「田舎？」

はな 「うん、ふん～、海しかないところで、他に何もなくて。やっぱり東京がいいなあって」 <自分の考えを引用して説明する>

「でも、もう戻るところないし、わたしー」 『協奏曲』

幸子 「そんなこと（病院に行くこと）私がいい出したら大変だし」

良雄 「兄さんがいうのさ」

幸子 「いわないでよかったわ。三時頃かな、（お母さんが）急に二階からおりてらして、デパートでも行って来るわって」 <第三者の話をそのまま伝える> 『ふぞろいⅡ』

これらの文末表現にはなぜ「ネ」も「ヨ」も付かないのかに関し第4節で論じる。

- 4) 「desirability」は望ましいかどうかに関する判断のことを言う。適当な訳語がないためか、赤塚・坪本（1998）では英語がそのまま使われている。筆者も赤塚・坪本からこの用語をそのまま借用する。
- 5) これらの用法に関し、詳しくは許（2000）を参照されたい。
- 6) (8)において、「バ」の後に来る終助詞「ナ」も「ネ」と同じ終助詞である。
- 7) 例文で「ヨ」を記していないのは、付加は可能だが、個人差や性差による違いの大きい場合である。
- 8) 話し手が相手の行動や心理的变化を導く情報を提示する際、「カラ」によっ

て提示される情報は相手の行動や心理的变化を導く要請の「理由」と考えられる場合もあるし、単に相手の行動に必要な前提情報を提示するものもある。「カラ（相手の行動や心理的变化を導く情報の提示）」でも、要請の「理由」の「カラ」には「ネ」も「ヨ」も付かないが、話し手が「カラ」によって相手の行動と結び付ける前提情報を提示する場合は、「ネ」が付き得る。

- 9) 本稿で言う「間接的な働きかけ」とは、話し手が相手の立場を考慮し、相手の行動を直接コントロールするより、間接的な言語表現で相手に話し手の意図（依頼・指示など）を察してもらい、行動してもらうことである。
- 10) しかし、同じく間接的な働きかけを表わす「命令・依頼・指示などを表わす『テ』」、「相手の行動や心理的变化を導く情報の提示『カラ』」には終助詞「ネ」「ヨ」が付き得る。これに関し、本稿の第4節で論じる。
- 11) 下線のあるものは実例であり、下線のないものは筆者が加えたものである。
- 12) 鎌田（2000）は、直接引用においても元の発話を完全に復元して伝えることが不可能であると指摘した。しかし、「ッテ」の前に終助詞（「ワ」、「ネ」など）が付いているような直接引用表現においては、元の発話への調整がなされた場合もあるだろうが、元の発話をそのまま伝えていることが絶対には言えないだろう。このように、話し手が第三者の話伝える際、元の発話への調整がなされたかどうかに関しては判断しにくい場合もあると思われる。

参考文献

- 赤塚紀子・坪本篤朗（1998）『モダリティと発話行為』 研究社出版
- 伊豆原英子（1993）『「ね」と「よ」再考—「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から』『日本語教育』 80号 pp.103-114
- 上野田鶴子（1982）「モダリティ：日本語・英語」『講座日本語学11巻：外国語との対照Ⅱ上』 明治書院 pp.122-141
- 大曾美恵子（1986）「誤用分析1『今日はいい天気ですね。』『はい、そうです。』」『日本語学』 Vol.15 No.9 明治書院 pp.91-94
- 鎌田修（2000）『日本語の引用』 ひつじ書房
- 高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』 Vol.12 No.10 明治書院 pp.18-25
- 陳常好（1987）「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接

- 辞一」『日本語学』Vol.6 No.7 明治書院 pp.93-109
- 西田直敏 (1977) 「助詞(1)」『岩波講座日本語 7—文法Ⅱ』岩波書店 pp.191-273
- 日向茂男・日比谷純子 (1988) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ16—日本語の構造』荒竹出版
- 許夏玲 (2001) 「話し言葉の文末における条件形『バ』『タラ』の意味機能」『日本語電子化資料収集・作成—コーパスに基づく日本語研究と日本語教育への応用を目指して—』名古屋大学国際言語文化研究科 pp.130-145
- (2000) 「話し言葉の文末におけるモダリティの表現形式—『接続助詞』『条件形』『第二中止形』『引用助詞』—」名古屋大学大学院文学研究科博士学位論文
- (1999) 「文末の『って』の意味と談話機能」『日本語教育』Vol.101 No.7 pp.81-90
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版

例文出典

- 『家』：『家なき子 2 (上)』野島伸司 (1995) 日本テレビ出版
- 『時』：『時にはいっしょに』山田太一 (1986) 大和書房
- 『ふぞろいⅡ／Ⅳ』：『ふぞろいの林檎たち (Ⅱ) (Ⅳ)』山田太一 (1988, 1997) 大和書房、マガジンハウス
- 『北』：『北の国から (前編)、(後編)』倉本聡 (1981) 理論社
- 『渡る』：『渡る世間は鬼ばかり (上)』橋田寿賀子 (1996) ラインブックス
- 『妹よ』：水橋文美江 (1995) フジテレビ
- 『協奏曲』：池端俊策 (1997) TBSテレビ
- 『サザエ』：『サザエさん』長谷川町子 (1996) フジテレビ
- 『ルパン 3 世』：宮崎駿 (1979) 東宝株式会社
- 『男はつらいよ』の台詞は CASTEL/J CJ-ROM V1,2 (1998) 日本語教育支援システム研究会によるものである。